

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。

『ほんとうの日本経済』 坂本貴志

著 講談社 285 頁 1000 円(税別)

「はじめに」には、次のように書かれています。世界の人口は長期的に増加を続けていた。経済は人口の増加とともに成長していくものだという暗黙の前提があった。しかし、日本の人口はいままさに調整局面から減少局面へと移行しつつある。日本経済はどうなるのか。

さて、どうなるのでしょうか？少し、見ていきます。

★人手不足先端、酒田市の例

・大井建設(従業員114人)では、建設業で困難とされた週休二日実施。これからは工事が受注できなくて倒産するのではなく、人手不足で倒産すると認識している。また、人手不足から利益が出にくい橋梁補修工事などは、入札不調の工事が増えてきた。事業者が案件を選ぶ時代になっていると語った。

・両羽商事(従業員30人)は、婦人服卸で開業し、現在はユニフォーム、介護事業をしている。新卒採用は取れないのでやめて、中途採用だけにしているが、中途も最近は応募がない。労働時間は大幅に減っている。基本残業無しが採用の決め手になったこともある。

・平野新聞舗

配達スタッフ高齢化、配達量減少

★需要不足から供給不足へ

・ITなどハイスキル、現場の仕事の双方で人手不足

⇒現場仕事の効率化に役立つロボットが少ない

⇒高齢者のさらなる高齢化

★正規化が進む若年労働市場、2019年から非正規減少

・非正規は、もはや正規がないからという働き方ではなくなっている

★賃金は上がり始めている

・時給は2010年代半ばを境に上昇

・大都市圏よりも地方で上昇

・建設現場、卸、小売、飲食などが顕著

・医療、福祉は上昇が鈍い

★労働時間の急速な減少

・男性若年労働者で顕著

・女性、高齢者など短時間労働者の増加

★労働参加率は主要国で最高水準に

15歳～64歳では、

・女性就業率 72.4%でドイツに次いで主要国第2位

・男性就業率 84.2%で第1位、2位ドイツは80.6%

65歳以上では、女性 41.3%

男性 61.0%、米国 37.6%、ドイツ 22.9%

・低所得者の急増

年間200万円以下の給与所得者増加

2000年⇒2021年

825万人⇒1126万人

★人件費高騰⇒インフレーション

労働集約的なサービスの物価があがりやすい

・設備修繕・維持、外装塗装費他各種工事費

・外食費

・宿泊料

家賃は近年低下が継続している

★デジタル化

・日本経済デジタル化不可欠、しかし高齢者のデジタル化への抵抗が大きい

☆「おわりに」から

・人手不足の深刻化による労働市場の需給ひっ迫は、今後も継続的な賃金上昇を引き起こす

・企業は省人化に徹底的に取り組まねばならない

・新しい技術の活用が必要

以上、まとめると労働力不足は継続し、それへの対処が課題だということだと思います。

この月刊サワネを、お知り合いの方に見せてあげてください、きっと喜んでいただけます。

「無収入工程」を削れ

『日経トップリーダー』3月号に賃上げの研究という記事がありました。編集者が工学博士でコンサルタントの内藤耕氏にインタビューしたものです。

賃上げの本質は生産性向上であるとしていますが、これは利益水準を上げることであります。この記事で取り上げているのは「無収入工程」の削減です。以下に簡単にご紹介します。

業務には、「収入工程」と「無収入工程」がある。後者は、利益にも顧客満足にもつながらない。だから、この工程を削減しよう。

ホテルチェーンのスーパーホテルは山本梁介会長が長年、業務を「仕事」「無駄」「作業」の3つに分解し、効率化に取り組んできた。仕事とは売上、顧客満足に貢献するもの。無駄は売上にも顧客満足にも貢献しないもの。作業はどちらにも貢献しないけれど、業務として必要なもの。山本会長の言う「無駄」「作業」が、ここでの「無収入工程」に相当する。

★ホテルの例：ゼロセッティング

浴衣、歯ブラシは客の要望を聞いてフロントで渡す⇒サービス低下ではない。製造業では生産工程の中に品質管理工程を入れるという考え方があがるが、ゼロセッティングはそれに近い。接客しながら必要なものを提供することで、工程数を削減する。

★無収入工程が生じやすい業務は、「段取り」「運搬」「保管」「チェック」「管理」「会議」「報連相」「人材育成」だ。

・人材育成は、業務単純化によって、教育量を減らせる。

わが社の無収入工程は何でしょうか？複雑な仕事、実は簡単にできるということがあると思います。複雑な仕事、面倒な仕事は無収入工程かもしれません。探してみましょう。

1人3役

「1人3役の旅館、売上高は8倍 多彩な経験積ませ人材定着」、これは、日本経済新聞 3月24日朝刊の一面トップ記事でした。ネットでも見ることができます。

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUA2775C0X20C25A2000000/>

記事の旅館では、一人の女性が、①三味線の伴奏に合わせて民謡を歌い、②朝食会場ではご飯をよそい、③郷土料理クッキング体験の講師もしている。この女性は76歳だ。同系列の別のホテルでは、1人の女性が、フロント、予約管理、レストランとカフェでの接客、売店での物販、観光のSNSでの発信を兼務している。

この会社は、新潟県湯沢町にある「株式会社いせん」です。2005年に就任した社長が、「マルチタスクで付加価値を生む仕事に集中してもらい、宿泊業以外でも通用する人材を育てたい」と考えて始めたものです。また、様々な経験を積めることで従業員の定着にもつながっているようです。

この記事を読んで、「1人3役」で検索してみました。

埼玉県春日部市の三州製菓株式会社というのが出てきました。こうあります。

不意の仕事に対応できるように始めた「1人3役」の結果お互いに仕事の代行ができることで、休暇を取得しやすくなっただけでなく、社内の風通しが良くなるとともに、各従業員の自発的な学びの姿勢を引き出された。

いかがでしょうか？少人数の会社ではもともと1人の人がいろいろな業務をされていると思いますが、さらに「1人3役」を進めることはできないでしょうか？「1人3役」は人手不足解消の手段のひとつです。